



Osaka Gakuin University Repository

Title	LI 構文の派生とその理論的帰結 (4) The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 4
Author(s)	川本 裕未 (Yumi Kawamoto)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 80 号 : 1-17
Issue Date	2020.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

LI 構文の派生とその理論的帰結 (4)

川 本 裕 未

5. 非対格動詞文の統語構造

本節では、LI 構文における場所句にはある種の制限がかかっていることに着目し、LI 構文で前置される場所句は付加詞ではなく、項でなければならないことを示す。そして、一般的に非対格動詞文の構造として考えられている (113) を修正し、

(113) [_{TP} T [_{VP} V [_{VP} V DP ...]]]

項である場所句を持つ文の構造として VP-LOC(ATION) の存在を仮定することで、新たな非対格動詞文の構造を提案し、さらに、VP-LOC の有無を非能格動詞文、他動詞文、能格動詞文にも適用することで、非対格動詞文以外の構文も含めて、統一的にそれぞれの統語構造を表すことができることを示す。

5.1 項としての場所句

以下の例文が示すように、非対格動詞文において場所を表す PP であれば何でも前置して LI 構文をつくることが可能というわけではない。

(114) a. On the stage appeared a world-famous singer.

b. *On his bicycle appeared John.

(Coopmans 1989)

(114a-b) の比較から明らかなのは、付加詞の PP は LI 構文をつくることができず、動詞に下位範疇化される PP、つまり動詞から θ 役割が付与される PP のみが LI 構文をつくることが許されるということである。さらに、動詞とその動詞が持つ項の間の構造的配列によって θ 役割が決まると仮定するなら、場所句 PP を項として持つ非対格動詞文の構造として、(113) ではなく、次の (115) を妥当なものとして提案することができる。

(115) $[_{TP} T [_{VP} V [_{VP-TH} DP V_{TH} [_{VP-LOC} V_{LOC} PP]]]]$

(115) において V_{TH} は THEME 項を認可し、 V_{LOC} は項としての場所句 (LOCATION¹⁷) を認可する。そして、項としての場所句は解釈不可能な人称素性 (三人称) を持つとする。

ただし、この項としての場所句は、次の (116a-b) のように音声的に空である場合も認可される。

(116) a. A letter arrived.

b. The most spectacular rainbow appeared.

(116a-b) では明示的な (overt) 場所句は提示されていないが、例えば (116a) であれば at me や from Boston、(116b) であれば in front of us のような何らかの場所の存在が前提となっており、文脈から設定される非明示的な (covert) 場所句が存在していると考え¹⁸。一方、音声的に空である項としての場所句を前置させた (117a-b) は、音声的に実現している構成素しか T が持つ (EPP 素性を伴う) 先端素性を満足させることができないという制約から排除される。

(117) a. *Arrived a letter.

b.*Appeared the most spectacular rainbow.

5.2 非能格動詞文、他動詞文、能格動詞文の統語構造

動詞の中には、AGENT 項や CAUSER 項のような外項を持つ解釈と、外項を持たない解釈（以下、非対格動詞的解釈と呼ぶ）の 2 通りを許すものがある。

(118) a. A man sat on the sofa.

b. A table sat in the corner.

(118a) は a man が自ら「座る」という行為をする動作主的解釈、換言すれば外項を持つ解釈と、そこに「置かれている、ある、いる」という、外項を持たない非対格動詞的解釈の間で曖昧である。一方、(118b) は後者の解釈しかできない。この事実は deliberately のような AGENT 指向の副詞を挿入することにより明らかになる。

(119) a. A man deliberately sat on the sofa.

b.*A table deliberately sat in the corner.

(119a) は外項を持つ解釈のみが許され、元々外項を持つ解釈が成り立たない (118b) は (119b) では非文となる。

さらに、(120a-b) のように虚辞の there を用いた文や、(121a-b) のように LI 構文においては、b 文のみならず a 文も非対格動詞的な解釈しか許されない。

(120) a. There sat a man on the sofa.

b. There sat a table in the corner.

(121) a. On the sofa sat a man.

b. In the corner sat a table.

つまり、外項を持つ解釈をする文では虚辞の出現や LI 構文が許されず、場所句は付加詞として生起している。一方、非対格動詞の解釈をする文では、虚辞や LI 構文が許されており、場所句が項となっている。すなわち、外項を持たない非対格動詞だけが場所句を LOCATION 項として認可し、一方、AGENT 項や CAUSER 項のような外項を持つ非能格動詞は項としての場所句を持たないことから、外項の有無によって、場所句を項として認可するか、付加詞として扱うのが決定されているように見える。

しかしながら、次のような THEME 項を持った他動詞文では、AGENT 項が存在するにも関わらず、場所句が項となっている。

(122) a. John put the book on the desk.

b. *John put the book.

これらの事実が示していることは、外項の有無ではなく、THEME 項の有無が、場所句を項として認可するか否かを左右しているということである。以上ことから次の一般化が得られる。

(123) LOCATION 項を認可する V_{LOC} を主要部とする VP-LOC を選択できるのは V_{TH} だけである。

UG が規定するのは次のような動詞句内の階層であるが、

(124) v...V...(V)...

(123) の規定から、英語の動詞は具体的にはそれぞれ次のような構造を持つこ

となる。

- (125) a. unergatives [TP T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]
 b. transitives [TP T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]
 c. unaccusatives [TP T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{TH} [_{VP-LOC} V_{LOC} PP]]]] (= (115))

英語の動詞には先に見た *sit* のように、外項を持つ解釈と非対格動詞的な解釈の 2 通りの解釈を許すものがあるが、そのような動詞は (125a) と (125c) のいずれの構造も持つことができると考えられる。また、(125b) では VP-LOC が丸括弧で囲まれており、*put* や *locate* のような動詞のように場所句を項として持ち、VP-LOC を有している場合と、*buy* や *eat* のように場所句を項として持たず、VP-LOC を有していない場合があることを示している。重要なことは、VP-TH を持たない場合には VP-LOC を持つことが許されないということである。

さらに、transitives が VP-LOC の選択に関してオプションがあるというこの考え方を非対格動詞にまで一般化するなら、(125c) の unaccusatives も (125b) と同様に、(126) のように VP-LOC を丸括弧に入れるべきで、VP-LOC が無い場合もあると考えられる。

- (126) unaccusatives [TP T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]

次のような能格動詞の自動詞文が、まさにこの (126) の VP-LOC を欠いている構造を持つと考えられる。*break*、*melt*、*open* のような能格動詞は、(127a) や (128a) のような他動詞文と (127b) や (128b) のような自動詞文をつくることができる。

- (127) a. John broke the chair.

- b. The chair broke.
- (128) a. Rain and warmer temperatures melted a lot of snow on the streets of Chicago.
- b. A lot of snow melted on the streets of Chicago.

自動詞用法の (127b) の主語 the chair と (128b) の主語 a lot of snow は AGENT 項や CAUSER 項ではなく、THEME 項であることから、能格動詞の自動詞用法は一般に非対格動詞に分類される。しかし、appear や come などのような一般的な非対格動詞と異なり、能格動詞は虚辞の there の生起や LI 構文を許さない。

- (129) a. *There broke a glass in the kitchen.
- b. *In the kitchen broke a glass.
- (130) a. *There melted a lot of snow on the streets of Chicago.
- b. *On the streets of Chicago melted a lot of snow.

(Levin and Rappaport 1995)

この能格動詞が LI 構文を許容しないという事実は、この種の構文が非対格動詞として (126) のような構造を持つが、VP-LOC を欠いているため、項としての場所句を持たず、そのため LI 構文が成立しないと説明することができる。尚、能格動詞構文において虚辞の there が許容されないことに関しては第 7 節で考察する。

以上、本節では、LI 構文を容認する非対格動詞文において場所句は付加詞ではなく、LOCATION 項であること、そして非対格動詞の構造は (126) であることを提案した。そして、この分析の妥当性は、sit のように外項を持つ解釈と非対格動詞的解釈の間で曖昧性をもつ動詞のそれぞれの解釈における構造を明らかにし、さらに、break などのような能格動詞の非対格動詞用法（自動

詞用法) で LI 構文が許容されない事実に対しても適切に説明を与えられることから支持される。

6. LI 構文の派生

本節では具体的に、LI 構文がどのような派生過程を経て生成されているのかについて検討する。第6.1節では Chomsky (2000, 2001) における probe-goal 関係に基づく Agree やフェーズの概念を導入し、フェーズ理論のもとで、前節で提案した非対格動詞文の構造 (126) から LI 構文が派生される過程を精査する。続く第6.2節では Chomsky (2007, 2008) で提案された素性継承や統語操作の parallel application のもとで、LI 構文がどのように派生されるのかについて概観する。

6.1 Chomsky (2000, 2001)

Chomsky (2000, 2001) の枠組みでは、C、T、v といった機能範疇がそれぞれの先端素性を満足させるために、Agree の関係をもとに goal となる構成素を指定部に誘引することで移動が行われるとされる。そして、派生は CP および v*P といったフェーズに達すると、顕在的統語部門内での操作が中断され、フェーズ主要部の補部は意味部門と LF に転送 (transfer) され、それ以降、フェーズ主要部より上位の主要部から接近できなくなる。

(131) Phase Impenetrability Condition (PIC)

In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.

(Chomsky 2000: 108)

まずは以下の非対格動詞文の派生について考える。

(132) The baby carriage rolled down the hill.

前節で非対格動詞文の場所句は項として (126) の VP-LOC 内に融合すると結論づけた。したがって、(132) の vP まで派生が進んだ段階の構造は以下のとおりである。

(133) [_{vP} v [_{VP-TH} the baby carriage V_{TH} [_{VP-LOC} rolled down the hill]]]

V_{LOC} に位置する動詞 rolled は down the hill を LOCATION 項として認可し、続いて、V_{TH} に移動、付加し、the baby carriage を THEME 項として認可する。さらに、動詞 rolled は軽動詞 v によって誘引され、v に移動、付加する。

(134) [_{vP} rolled [_{VP-TH} the baby carriage ~~rolled~~ [_{VP-LOC} ~~rolled~~ down the hill]]]

(134) の vP は外項を持たないのでフェーズとならず、統語部門での派生が続行され、T が融合する。

(135) [_{TP} T [_{vP} rolled [_{VP-TH} the baby carriage ~~rolled~~ [_{VP-LOC} ~~rolled~~ down the hill]]]]

T はその先端素性の EPP 素性を満たすため probe となって領域内で goal を探索する。もし the baby carriage を goal として Agree の関係を結んだ場合、T は the baby carriage に主格を与え、SPEC-T まで誘引し、(132)、すなわち (136) が派生される。

(136) [_{TP} the baby carriage T [_{vP} rolled [_{VP-TH} ~~the baby carriage~~ ~~rolled~~ [_{VP-LOC} ~~rolled~~ down the hill]]]]

一方、LI 構文 (137) の派生は以下のとおりである。

(137) Down the hill rolled the baby carriage.

派生が (135) まで達した段階で、T が probe となって領域内で goal を探索する。(135) を (138) として再掲する。

(138) [_{TP} T [_{VP} rolled [_{VP-TH} the baby carriage **rolled** [_{VP-LOC} **rolled** down the hill]]]]

DP の the hill は前置詞 down から既に対格をマークされており、PP の down the hill は前置詞句であるため、T による格標示を要求しないが、解釈不可能な人称素性を持っているため、T に対して active goal である。T はその先端素性の EPP を満たすために down the hill を goal として Agree の関係に入る。

ここで、probe は以下の MLC に基づいて goal となる構成素を誘引すると考えられている。

(139) Minimal Link Condition (MLC)

K attracts α only if there is no β , β closer to K than α , such that
K attracts β . (Chomsky 1995: 311)

(139) の中における closeness は次のように定義される。

(140) If β c-commands α and τ is the target of raising, then β is closer to K than α unless β is in the same minimal domain as (a) τ or (b) α .

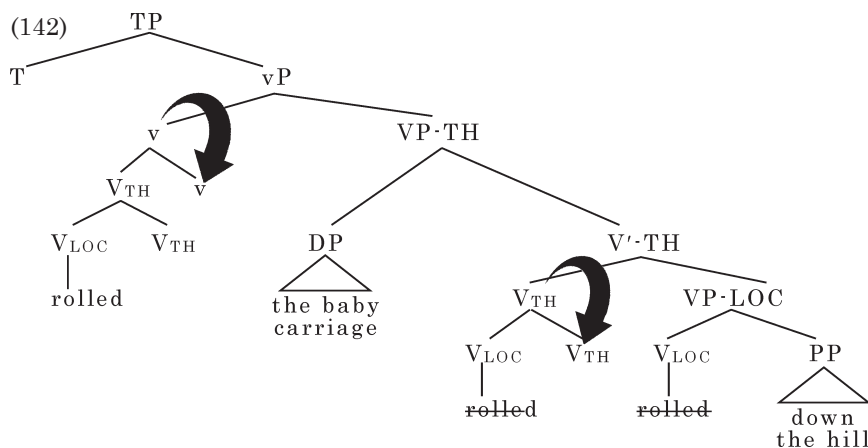
(Chomsky 1995: 356)

さらに、minimal domain（最小領域）とは以下のように定義される。

- (141) The minimal domain $\text{Min}(\delta(\text{CH}))$ of CH is the smallest subset K of $\delta(\text{CH})$ such that for any $\gamma \in \delta(\text{CH})$, some $\beta \in K$ reflexively dominates γ .

(Chomsky 1995, 299)

(138) では動詞 rolled が V_{LOC} から V_{TH} に、さらに V_{TH} から v に付加しつつ主要部移動をしているので、詳しくは以下のような構造をなしている。



(142) の矢印の部分が (141) における some $\beta \in K$ reflexively dominates γ にあたり、(138) において、VP·TH 内の the baby carriage と VP·LOC 内の down the hill は同じ最小領域内にあることになり、(140) により両者は T から等距離にあるので、問題無く T の先端素性は the baby carriage よりも後方にある down the hill を SPEC-T に誘引することができる。

- (143) [TP down the hill T [VP rolled [VP-TH ~~down the hill~~ the baby carriage
rolled [VP-LOC rolled down the hill]]]]

ところで、次の例が示すように、LI 構文において T の一致素性の値を決定しているのは SPEC-T に入った場所句ではなく、VP-TH に留まっている DP である。

- (144) a. In the park stand two bronze statues.
b. *In the park stands two bronze statues.
- (145) a. In the country remain many significant economic problems.
b. *In the country remains many significant economic problems.

このことは以下のような T による更なる探索によって導き出される。T は *down the hill* を指定部に誘引したもののその φ 素性が不完全なため、自らの解釈不可能な φ 素性に値を与えることができず、再度完全な φ 素性を持つ他の構成素を探索することになる。その結果、*the baby carriage* と Agree の関係に入り、その φ 素性の値を写し取り、主格を与える。

上記の派生過程では、動詞の後ろの DP は T との Agree を通じて主格を付与されることになるが、そのことは以下の言語事実と一致する。以下の英語の例 (146a) およびアイスランド語の例 (146b) では、動詞の後ろの THEME 項は主格で標示されている。

- (146) a. Under the garden wall sat I. (Levine 1989)
b. Það hafa komið nokkrir gestir
there have come some-nom guests-nom (Radford 2009)

LI 構文の派生過程 (142) に戻って、(142) にさらに Topic head が融合する

と、次のような構造になる。

- (147) [_{TopP} Top [_{TP} down the hill T [_{VP} rolled [_{VP-TH} ~~down the hill~~ the baby carriage ~~rolled~~ [_{VP-LOC} ~~rolled down the hill~~]]]]

Topic head は領域内で話題化できる要素を探し、TP 内の down the hill をその指定部に A-bar 移動させる。その結果、LI 構文 (148)、つまり (137) が派生される。

- (148) Down the hill rolled the baby carriage.

以上、Chomsky (2000、2001) における probe-goal 関係に基づく Agree や フェーズの理論の枠組みのもとで、本稿で提案している非対格動詞文の構造 (126) から LI 構文が派生される過程を示した。

6.2 Chomsky (2007、2008)

Chomsky (2007、2008) では、非フェーズ主要部は解釈可能な素性のみを持った状態で派生に導入され、そしてその後、上位のフェーズ主要部から解釈不可能な素性を継承するという提案がされている。これによると、例えば T が領域内の構成素と Agree の関係を結ぶために必要な ϕ 素性などの解釈不可能な素性は、T ではなく C が担って派生に入り、その後 T に移譲されることになる。フェーズ主要部から非フェーズ主要部への素性の継承を認めたことから、Agree、Move、Case-marking 等の全ての統語操作は従来の bottom-up 方式で行われるのではなく、ランダムに適用されることとなる。ここでは、本稿で提案された LI 構文の派生過程がこの Chomsky (2007、2008) の枠組みのもとでも首尾よく機能するのかどうかについて検討する。

Chomsky (2007、2008) の枠組みのもとでは、フェーズ主要部の C は

(149a) のように先端素性ととも解釈不可能な φ 素性も持った形で派生に導入され、派生の過程で (149b) のようにそれらの素性は補部の TP の主要部の T に継承される。

- (149) a. $[_{CP} C_{[u\varphi]} [_{Edge}] [_{TP} T \cdots]]$
 b. $[_{CP} C [_{TP} T_{[u\varphi]} [_{Edge}] \cdots]]$

しかしながら、LI 構文では最終的に場所句は TopicP に移動することになるので、素性の継承は (149a-b) ではなく (150a-b) のようなものになると考えられる。

- (150) a. $[_{CP} C_{[u\varphi]} [_{Edge}] [_{Topic}] [_{TopicP} Top [_{TP} T \cdots]]]$
 b. $[_{CP} C [_{TopicP} Top [_{Topic}] [_{TP} T_{[u\varphi]} [_{Edge}] \cdots]]]]$

これを (148) ((151) として再録) の派生に当てはめてみよう。

- (151) Down the hill rolled the baby carriage.

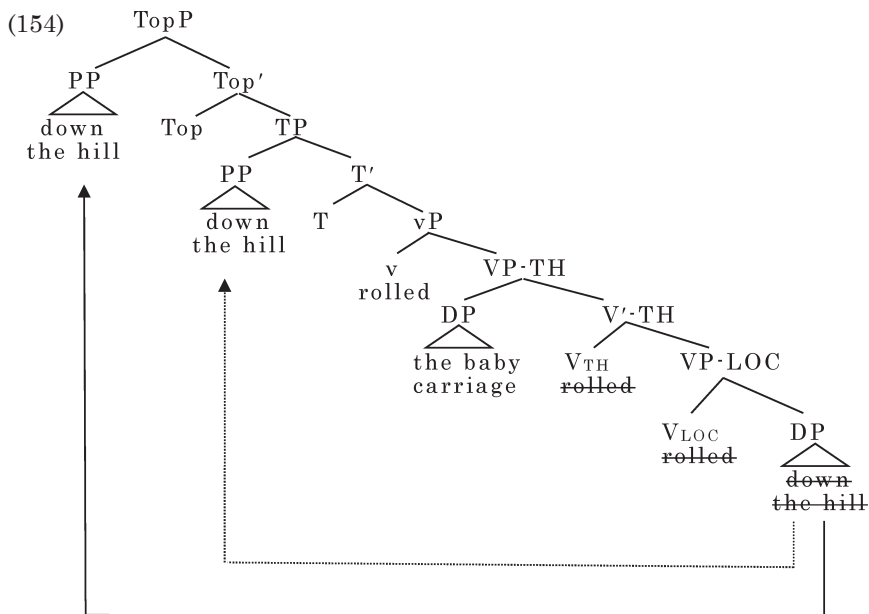
派生が TP まで達した段階の構造は以下のとおりである。

- (152) $[_{TP} T [_{VP} v [_{VP-TH} the\ baby\ carriage\ V_{TH} [_{VP-LOC} rolled\ down\ the\ hill]]]]$

この段階では T は先端素性や φ 素性といった移動を誘発する素性を持たないのでまだ移動は起きない。ここに TopicP や CP が TP に融合すると (153a) となり、C から Topic の素性（これも EPP 素性を有している）は Topic head に、 φ 素性と先端素性は T にそれぞれ継承され、(153b) の構造を形成する。

- (153) a. [_{CP} C_[uφ] [_{Edge}] [_{Topic}] [_{TopP} Top [_{TP} T [_{vP} v [_{VP·TH} the baby carriage V_{TH} [_{VP·LOC} rolled down the hill]]]]]]]
- b. [_{CP} C [_{TopP} Top [_{Topic}] [_{TP} T_[uφ] [_{Edge}] [_{vP} v [_{VP·TH} the baby carriage V_{TH} [_{VP·LOC} rolled down the hill]]]]]]]

Chomsky (2008) は、この段階で Topic head による down the hill の Topic 指定部への誘引と、T による down the hill の SPEC-T への誘引が同時に起こるとしている。



このあと、T の解釈不可能な φ 素性が完全な φ 素性を持つ構成素として the baby carriage と Agree の関係に入り、その φ 素性の値を写し取り、派生が完了する。

本節では、第6.1節で Chomsky (2000、2001) の枠組みで、また第6.2節では Chomsky (2007、2008) の枠組みでそれぞれ、前節で提案した非対格動詞構文の構造 (126) からどのように LI 構文が派生されるのかについて検討した。いずれの枠組みであっても、(126) では VP-LOC を持つ非対格動詞は、動詞が V_{LOC} から V_{TH} を経て v まで上昇するために、THEME 項と LOCATION 項が T から等距離に位置することになり、T によってどちらの項も SPEC-T に誘引される資格を有する。さらに、 vP が外項を持たないためフェーズにならず、T による vP 内部の構成素への接近が可能である。そして、T による指定部への誘引に LOCATION 項が選ばれ、Topic head によって TopicP の指定部へ誘引された場合 LI 構文が派生されるのである。以下では Chomsky (2000、2001) の枠組みで議論を進める。

(「LI 構文の派生とその理論的帰結 (5)」¹⁹に続く)

注

- 17 ここでの LOCATION には GOAL や SOURCE も含まれる。以降、LOCATION や「場所句」は GOAL や SOURCE をも含んだ広い意味での場所句表現を表すものとする。
- 18 同様に虚辞 *there* を使った文においても場所句の存在が前提となっており、明示的な場所句が提示されていなくても話し手と聞き手の間で了解された非明示的な場所句が存在する。これについては第7.1節で取り上げる。
- 19 本論文は当初 4 回連載で完結の予定であったが、結論に至るまでの分析、考察、論考に予定を大幅に上回る誌面を費やすことになったため、予定を変更して第 5 回完結とする。

参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. In: Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from Below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interfaces+Recursion=Lnaguage?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, 1-29. New York: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2008) On Phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Coopmans, Peter (1989) Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English. *Language* 65: 728-51.
- 川本裕未 (2019) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)」『大阪学院大学外国語論集』第78号.
- 川本裕未 (2020) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (3)」『大阪学院大学外国語論集』第79号.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Levine, Robert (1989) On Focus Inversion: Syntactic Valence and the Role of a SUBCAT List. *Linguistics* 17: 1013-1055.
- Radford, Andrew (2009) *Analyzing English Sentences: A Minimalist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 4

Yumi Kawamoto

Typically, only unaccusative verbs of existence and appearance, but not unergative verbs, allow the Locative Inversion construction (LIC). However, not all locative phrases with unaccusatives can be fronted to form an LIC, as exemplified by the contrast in grammaticality between the grammatical sentence *On the stage appeared a famous singer* and the ungrammatical sentence **On his bicycle appeared John*. This fact leads us to claim that it is only LOCATIVE arguments, but not locative adjuncts, that are allowed to be fronted to form an LIC in a sentence carrying VP-LOC(ATION), headed by V_{LOC} , which licenses LOCATIVE arguments.

By expanding the notion of VP-LOC into the syntactic structure of transitive verbs, we show the *put*-type transitive verbs, which take two internal arguments, that is, THEME and LOCATION, are straightforwardly incorporated into our theory, as well as transitive verbs taking single arguments. Furthermore, we show the VP-LOC theory well explains the fact that ergative verbs, such as *break* and *open*, which do not take an external argument in the intransitive use, do not allow the LIC.